

# 日英両国比較 (XXV)

— 動詞について —

馬 場 熙

A COMPARATIVE STUDY FOR JAPANESE IN LEARNING ENGLISH (XXV)

— On Verbs —

Hiroshi Baba

## Abstract

In the first book of Moses, commonly called Genesis in English and Souseiki in Japanese, how the universe, the world, and the mankind was created is recorded. What "genesis" means is origin, creation, and beginning and thus the book entitled "Genesis" is a book which manifests "the origins of all human history." The first book of Moses is also called "the first book of the Bible," dealing with the creation as well as the beginning of the inspired word. This book records that the inspired word was shot out from the mouth of the Creator. In the light of the study of semantic roles and grammatical relations, the inspired word of Creator should be rationally considered as a key to a study of how verbs are effected syntactically and semantically in a clause in the Japanese and English languages. From the standpoint of linguistics, *verb* is a class of words which predicates and its function is predication; that is, one of the parts of speech which expresses what someone or something does or is. This linguistic view of semantic roles and grammatical relations might lead to the idea that semantic roles should be associated with grammatical relations. It is reasonable to think that the most common word-order of verbs is in the second place in English, and that the normal order of sentence elements in Japanese is Subject — Object — *Verb*. The verb in Japanese always comes at the end of the sentence and it becomes the chief word of a sentence.

**Key Words:** languages, meaning, scatter,<sup>1)</sup> dictionary, motion type verb, come.

There are, perhaps, a great many kinds of languages in the world, and no kind is without meaning.<sup>2)</sup>

## 2. Many Languages

「日英両国語の比較研究に携わって40年近くになろうとしているが、この研究を通して示された事の一つに、両言語ともにその語彙の豊富さである」。人間が生きる限り、また人が生活をしている限り、そこには必ず語彙を生まれてくるのである。世界中には現在五千以上の言語があると言われていたが<sup>3)</sup>、調査者はどの様にしてその数字を出したのであろうか。現在約三千以上の言語が実際に話されていると言われていたことは、紀要第44集に掲載された拙著の論文で述べた事ではあったが<sup>4)</sup>、日本語や英語の語彙は一体どれくらいの数になるのだろうか。我々は世界の中のどこにおいても言語から知識を習得できるにしても、辞書やそれに類する資

料は何千という主要語があるにしても、はっきりした数値が出せないが故に上の様な質問が出てくるのである<sup>5)</sup>。従って日本語に関しても次の様な質問が出てくるのは当然な事であろう：

How many words are there in the Japanese language ?

これは易しいようで非常に難しい問題である。語彙項目や基礎的数値に対する合意が得られるかどうか問題であるし、語数を計算するとなるとかなりの疲れを伴う事でもあるし、複雑でもあるし、困難さがあげられるからでもある。従って経験上言える事は、出された数値がはたして完全なものであるか、系統立てられた上での数値であるかどうか疑わしいからであるという説明は一般に受け入れられていると考えられる<sup>6)</sup>。OCELは信頼出来る数値が提供できない理由として次の5つを挙げている：

- (1) 電子化形式基礎資料が言語全体としての利用価値を示しているかどうかの問題がある。
- (2) 利用価値があったとした場合、数を数え始めた時点での価値はどれくらいのものなのか、また機能的過程を経てなされた統計上の算定は評価価値があるかどうかの問題がある。
- (3) それ故に算出された数値にずれが生じないかという問題がある。
- (4) 安全装置が働いていたとしても全体の計算と個々の計算器との間に違いが生じないだろうかという問題がある。
- (5) 計算器や計算する人の努力とか仕事を均質化していく管理体制も必要であるが、手におえないほど莫大な時間を消費して、ある時点で調査した内容とずれが生じないかどうかの恐れがある<sup>7)</sup>。

英語の語彙数に関してThe Oxford English Dictionaryは500,000以上の項目をあげて、それを語(words)としているが、一般向けの辞書は100,000以上の項目にとどまっている<sup>8)</sup>。ちなみに日本の一般的な国語辞書である広辞苑はその収載項目が約200,000以上となっている。そうして卓上形の新潮国語辞典は130,000を超える項目が収載されている。小学館の国語辞書250,000を超えた項目が収載されている。

英和辞典に目を向けると2001年に発刊された三省堂発行のグランドコンサイズ英和辞典の総収録項目は360,000を超え、研究社大英和辞典の総収録項目数は260,000超である。

各辞書の収録項目数を凡例や前書きの部分で確認してみると大型辞書は優に500,000を超えて、卓上形の辞書でも収録項目数が300,000前後となりはじめた。この様な莫大な数の項目数が辞書に収録されているのを見ただけでも人間活動の活発さと、地球上に62億から63億の人口がひしめいている事実から情報を得るとした場合その数に見合っただけの語彙が存在しても決して不思議な事ではないだろうと考えられる。この状況をしばらく目をつぶって考えて見ると、前提として掲載した聖書の言葉を思い出すのである。再度その言葉を欽定訳の英語と日本語の聖書の文語訳で掲載してみるとそれらは次の通りである。(a)は英語で、(b)が日本語での表記になる。

1. (a) There are, it may be, so many kinds of voices in the world, and none of them is without signfication. (I Cor. 14 : 10)
- (b) 世には國語くにごとばの類たぐいおほかれど、一つとして意義あらぬはなし。(哥前 14 : 10)

(a) と (b) の動詞部分を取り出して列挙すると次の様になる。

2. (a) are — may be — is (without)  
(b) (おほ) かれど — あらぬ — なし

日本語と英語（あるいは英語と日本語）を並べてあるいは列挙して論じるのは対照方法になる。理由は構造・発音・表記が全く異なるからである。ここで注意しなくていけないのは動詞の取り扱いに関してであるが、日英両国語とも動詞と修飾語とを結合させて意味理解をしていかなければならない事もある事を認識しておかなくてはならないのである。理由は意味論的立場から述べると、動詞単独のみで意味を伝達できる語と、他の語と組み合わせる事によって意味を成り立たせて伝達している動詞が存在するからである。統語論的に見ると、他の品詞との結合によって発生する機能的関係上の意味で、換言すれば他の品詞との結合によって発生する新たな意味でもある。

(a)の英文の最初に出てくる動詞は連結動詞 (linking verb or copula) であり、しかも *there* で導入されているので existential *there* - clause という事になる<sup>9)</sup>。前回の紀要でも主張しておいたように *there* は主語になり得ない。例えば次の例文では、*there* によって文が導入されているが動詞は主語の前に来て、しかも補語は存在していないのである。

3. (a) *There is no hope.*  
(b) 希望がない。

この例文において動詞は主語の前に来ているという事は、主語は“hope”であり、動詞は“is”である事を指している。“There”は文は全体を導入して、本来は“*No hope is.*”で、“there”という副詞機能語を導入する事によって空間的配置をこの文全体にもたせたのである。そうして主語であるが、これを使う話し手は「希望がない事を強調したいのであって、hope そのものを否定語で強調したいのである。意味としては、客観的に希望が全くない事が述べられて動的否定語 (dynamic negative) になっている。これが“hopeless”という語が使われるとすべてをあきらめて成り行きにまかせる静的否定語 (static negative) と言える。前者は、動的否定語なので、全く希望がない又は絶望となり、後者は「希望がある」または「希望が生まれる」と静的に変わる可能性があり得るのである。

4. (a) *There is no hope.* → *There is no hope of something.*  
(b) 希望がない。 → 物事に対する希望がない。

この場合の *there* は副詞の機能としての働きもっており、動詞の補語ではないのである<sup>10)</sup>。補語というのはあくまでも文の述部における機能を有して、文の文法的構成を完成させる働きをするのである<sup>11)</sup>。

次に 2 (b) の例句の動詞部分の議論を進めたいと思う。「かれど」の「かれ」は「故」で、その意味は、前句を受けて「こういうわけで」とか「ゆえに」の意味と推察する。「ど」は「と」の濁音で、意味は「かくあり」からきて「ああだ」「こうだ」の意味に近いと推察する。「あらぬ」は、「全く別の」とか「意外な」の意味と推察する。従って全体の意味は「おほくあ

るので」となると考えられる。最後に「なし」は「無い」に通じて、「存在しない」という意味である<sup>12)</sup>。

さて議論を少し前に戻すならば、現在地球には62億人と3,000から4,000の言語が実際に使用されていると見なした場合、何故このように多くの言語が話されるようになったという問題は、ある記事を想越させるのに十分である。その記事の一部を掲載してみると次のようになる。

4. (a) Now the whole earth used the same language and the same words ... “Come, let Us go, down and there confuse their language, that they may not understand one another's speech. (Gn. 11 : 1, 7)
- (b) さて、全地は一つのことば、一つの話しことばであった……さあ、降りて行って、そこで彼らのことばを混乱させ、彼らが互いに通じないようにしよう。  
(創 11:1, 7)

この記事から判読されることは、現在地球上には約7,000の言語があるとして、その中で使用されているのが3,000から4,000と見積られているが、ある時代に一つの集約されたたった一つの言語のみが使用されていた事になる。これはコミュニケーションという観点から見れば実にうらやましい限りである。日本人が英語を習う時に文法構造・表記法・発音が違う言語を使う時ほどその困難さは測り知れないのである。この記事はノアの洪水以降の出来事でもあったし、多くの人達が生まれて来たにもかかわらず一つの言語のみで用が足せた事は驚くべき事実であったに違いないのである。

さて、この例文の鍵となる言葉は、名詞は一つのことば (the same language)、一つのことば (the same words)、互いのことば (one another's speech) で、動詞は、であった=使用していた (used)、混乱させ (confuse)、通じないようにしよう (may not understand) 等が中心的な語句となる。一つのことばを話すためには地理的に同一場所であるという事が最低の条件となる。そのためには彼らがどこに住んでいたを知る事も必要条件になる、その例文は次のようになる。

5. (a) And it came about as they journeyed east, that they found a plain in the land of Shinar and settled there. (Gn. 11 : 2)
- (b) そのころ、人々は東の方から移動して来て、シナルの地に平地を見つけ、そこに定住した。(創 11:2)

5と4の例文の流れにおいては、さらに5と4の以前においては、意味論的に述べるなら、settling together → scattering → settling together → scatteringを繰り返して来た事になる。さらに詳しく述べるならsettling together → journey (= moving) → scatteringの一連の流れが見えて来るのである。日本語で言えば定住→拡散の繰り返しの中であって、定住と拡散の間にも一つの鍵となる言葉が入るのである。それが英語でも述べたように動きの象徴的言葉として「移動」が入るのである。改めて述べるならば、定住→移動→拡散→定住→移動というこの一連の人間の集団の動きに伴って、人間の言語活動も静力学 (statics) 的特徴から動力学 (dynamics) 的象徴へと移っていくに違いないのである。「一つのことば」や「一つの話しこ

とば」の変化は、静力学 (statics) の範疇に入り、日英語のような二国語間以上の変化は動力学 (dynamics) 的な範疇に入るのである。従って日英両国語比較 (含む対照) は動力学的な範疇において議論なされなければならないと考えられるのである。

### 3. 動詞について

テキストとして使用されている基礎資料<sup>13)</sup>における動詞について考察を試みて見ようと思う。基礎資料において使用されていた動詞はどのような種類の動詞があったか、またその頻度はどれぐらいであったのか、また聖書全体の中ではどれぐらいの割合で動詞が使われていたのかを見る事は全体の流れを見渡すのに極めて有効な方向と言えるであろう。

1	went	2	came	3	looked	4	saw
5	behold	6	were	7	lying	8	watered
9	was	10	were	11	roll	12	water
13	put	14	said	15	are	16	said
17	are	18	said	19	know	20	said
21	know	22	said	23	Is	24	said
25	is	26	behold	27	is	28	coming
29	said	30	Behold	31	is	32	is (not)
33	Water	34	go	35	pasture	36	said
37	are (gathered)	38	gathered	39	roll	40	water
41	was	42	speaking	43	came	44	was
45	came	46	saw	47	went (up)	48	rolled
49	watered	50	kissed	51	lifted	52	wept
53	told	54	was	55	was	56	ran
57	told	58	came (about)	59	heard	60	ran
61	embraced	62	kissed	63	brought	64	related
65	said	66	are	67	stayed	68	said
69	are	70	serve	71	Tell	72	(shall) be
73	had	74	was	75	were	76	were
77	was	78	loved	79	said	80	(will) serve
81	said	82	is	83	give	84	(should) give
85	stay	86	served	87	seemed	88	said
89	Give	90	is (completed)	91	(is) completed	92	(may) go
93	gathered	94	made	95	came (about)	96	took
97	brought	98	went	99	gave	100	come (about)
101	behold	102	was	103	said	104	is
105	(have) done	106	Was... not	107	served	108	(have)... deceived
109	said	110	is (not)	111	Complete	112	(will) give
113	(shall) serve	114	did	115	completed	116	gave
117	gave	118	went	119	loved	120	served
121	saw	122	was (unloved)	123	opened	124	was (barrar)
125	conceived	126	bore	127	named	128	said
129	(has) seen	130	(will) love	131	conceived	132	bore
133	said	134	(has) heard	135	am (unloved)	136	(has) given
137	named	138	conceived	139	bore	140	said
141	(will) become	142	(become) attached	143	(have) borne	144	was (named)
145	(was) named	146	conceived	147	bore	148	said
149	(will) praise	150	named	151	stopped	152	gathered

それではまず最初に動詞が使われている順番を忠実に追ってみる事にする。当然重複して使われている動詞もある事は事実である。

番号は資料の中でその動詞が何番目に使われているかを示す目安である。152個の動詞が重複文も含めて使われている事になる。<sup>14)</sup>

次にどの動詞が何回使われていたかを調べてみたところ次のようになっていた。

1	went	(4)	2	came	(6)	3	looked	(1)	4	saw	(3)
5	behold	(4)	6	were	(3)	7	lying	(1)	8	watered	(2)
9	was	(13)	10	roll	(2)	11	water	(3)	12	put	(1)
13	said	(19)	14	are	(5)	15	know	(2)	16	is	(9)
17	coming	(1)	18	go	(2)	19	pasture	(1)	20	gathered	(2)
21	speaking	(1)	22	rolled	(1)	23	kissed	(2)	24	lifted	(1)
25	wept	(1)	26	told	(2)	27	ran	(2)	28	heard	(2)
29	embraced	(1)	30	brought	(2)	31	related	(1)	32	stayed	(1)
33	serve	(3)	34	tell	(1)	35	be	(1)	36	had	(1)
37	loved	(2)	38	give	(4)	39	seemed	(1)	40	completed	(2)
41	made	(1)	42	took	(1)	43	gave	(3)	44	done	(1)
45	served	(3)	46	deceived	(1)	47	complete	(1)	48	did	(1)
49	opened	(1)	50	conceived	(4)	51	bore	(4)	52	named	(4)
53	seen	(1)	54	love	(1)	55	am	(1)	56	given	(1)
57	become	(1)	58	attached	(1)	59	borne	(1)	60	praise	(1)
61	stopped	(1)	62	stay	(1)						

この一覧表は各々の動詞が資料の中で使用されている回数を示しているのが丸形括弧の中の数字である。従って全部で62種類の動詞が使われている事が判った。この中で一番使われている動詞は告知動詞 (the speaking verb) が19回ともっとも多く、次いで連結動詞 (linking verb) wasの13回が目につくのである。他の動詞は一ケタ台で、その中で移動動詞 (the verb of moving) の“come”が6回使われている。次々に個々の動詞を考察して見るが、告知動詞 (the speaking verb) の“say”は前回の紀要で議論を行っているので、今回は動詞“come”について検討してみる。

#### 4. Motion type verb — come

前回の紀要同様、分類はR.M.W.Dixonの方法に従いMotion type verbの範疇に動詞“come”を入れてみた。Dixonの分類に従えば、Motion-bに入り大範疇ではRprimary-A verb typeという事になる<sup>15)</sup>。

“Come”はthe ARRIVE subtypeで、動きを取り扱う動詞で、はっきりした場所 (Locus) に関しての動きを表示する動詞である<sup>16)</sup>。細分類化された動詞 (i) 到着する (arrive)、戻る (return)、行く (go)、来る (come) 等である。(ii) は、入る (enter)、横切る (cross)、出発する (depart)、旅行する (travel)、通過する (pass)、脱出する (escape)、中に入る (come in)、外へ出る (go out)、(iii) は、到着する (reach)、近づく (approach)、訪問する (visit) 等となっている<sup>17)</sup>。

次にテキスト資料の動詞“come”について考察してみる。その動詞は資料では6回使われているので、それらの例文を例示してみると次の通りである。

6. (a) Then Jacob went on his journey, and *came*<sup>18)</sup> to the land of the sons of the east. (Gn. 29 : 1)  
(b) ヤコブは旅を続けて、東の人々の国へ行った。(創 29 : 1)
7. (a) While he was still speaking with them, Rachel *came*<sup>19)</sup> with her father's sheep, for she was a shepherdess. (Gn. 29 : 9)  
(b) ヤコブがまだ彼らと話しているとき、ラケルが父の羊の群れを連れてやって来た。(創 29 : 9)
8. (a) And it *came*<sup>20)</sup> about, when Jacob saw Rachel the daughter of Laban his mother's brother, and the sheep of Laban his mother's brother, that Jacob went up, and rolled the stone from the mouth of the well, and watered the flocks of Laban his mother's brother. (Gn. 29 : 10)  
(b) ヤコブが自分の母の兄ラバンの娘ラケルと、母の兄ラバンの羊の群れを見ると、すぐ近寄って行って、井戸の口の上の石をころがし、母の兄ラバンの羊の群れに水を飲ませた。(創 29 : 10)
9. (a) So it *came* about, when Laban heard the news of Jacob his sister's son, that he ran to meet him, and embraced him and kissed him, and brought him to his house. (Gn. 29 : 13)  
(b) ラバンは、妹の子ヤコブのことを聞くとすぐ、彼を迎えに走って行き、彼を抱いて、口づけした。そして彼を自分の家に連れて来た。ヤコブはラバンに事の次第のすべてを話した。(創 29 : 13)
10. (a) Now it *came* about in the evening that he took his daughter Leah, and brought her to him; and Jacob went in to her. (Gn. 29 : 23)  
(b) 夕方になって、ラバンはその娘レアをとり、彼女をヤコブのところに行かせたので、ヤコブは彼女のところにはいった。(創 29 : 23)
11. (a) So it *came* about in the morning that, behold, it was Leah ! (Gn. 29 : 25)  
(b) 朝になって、見ると、それはレアであった。(創 29 : 25)

6 (a) の例文の “*came to*”<sup>18)</sup> の基本的意味は “*went,*” “*came,*” “*walked*” であり、歩いていった (*walked*) であるという解釈が聖書言語 (biblical language) の特徴である。一般的な意味では (to become conscious) とか (to return to consciousness) となる。

7 の (a) (b) の例文では、*came with* は動詞句であるが、文脈上は (*went*) で、動詞の一般的な意味は (to travel with someone) となる。例文で一緒に同行したのがある人の所有物である羊 (sheep) たちであった。

8 (a)、9 (a)、10(a)、11(a) の例文は (*it came about*) の定型節で慣用語節になっており、

「そういう事が起こった」の意で英語では “It happened that …” 等となる。この例文では、日本語として直接表面に出てくることなく全体の中に隠されているのである。

Comeの使用頻度は高く、創世記 (Genesis) で86回、旧約聖書 (創世記以外の旧約聖書の意味) 1364回、創世記を含めた旧約聖書全体では1450回、新約聖書では493回、全体では1943回の使用頻度で創世記と旧・新約聖書の割合は86回 / 1943回で4.4%となっている。

### Notes / 註

- 1) The Hebrew-Greek Key Study Bible, *New American Standard*, Red Letter ed. (Chattanooga : AMG Publishers, 1977). Gn. 11 : 7 [cited hereafter as *NAS*] / さて、全地は一つのことば、一つの話しことばであった……さあ、降りて行って、そこでの彼らのことばを混乱させ、彼らが互いにことばが通じないようにしよう。] (*New Japanese Bible* / 新改訳、第3版、東京：日本聖書刊行会 創世記11章1節、7節)。[以下 *NJB* と略称する] この後、創世記11章8節及び9節において言語の混乱が生じた事が記されている。それらの記事は次の通りである。So the Lord scattered them abroad from there over the face of the whole earth; and they stopped building the city. Therefore its name was called Babel, because there the Lord confused the language of the whole earth; and from there the LORD scattered them abroad over the face of the whole earth. / こうして主は人々を、そこから地の全面に散らされたので、彼らはその町を建てのをやめた。それゆえ、その町の名はバベルと呼ばれた。主が全地のことばをそこで混乱させたから、すなわち、主が人々をそこから地の全面に散らしたからである。この二つの節における「かぎとなることば (the Key Words)」の動詞部分を採り上げると、scattered (散らされた)、sttoped (やめた)、was called (呼ばれた)、confused (混乱させた) の四つの動詞となる。さらに、これら動詞の英語と漢字の語源の意味と、動詞の変化ではない基体上の意味と文脈上の意味は次のようになる：Scatteredは、屈折 (inflection) の活用 (conjugation) の理論により、その基体 (base) は “scatter” となり、基体と屈折という呼称は、文法上の語形 (a grammatical form of a word) であり、動詞の法 (mood)、時制 (tense)、人称 (person)、数 (number) によって屈折が生じるが、その語源の意味は、分散させる (disperse)、まき散らす (sprinkle) である。中世英語 (ME) は “scatern” で、ヘブライ語では פוּט (puts) 又は זָרָח (zarah) である。一方、日本語の「散る」は、「散」と「る」によって動詞を形成している。「散る」は基体 (base, root) で、単純現在時制 (simple present tense) でもある。その単純過去時制 (simple past tense) は「散った (chitta or scattered)」となる。単純現在時制否定形 (negative form of simple present tense) は「散らない (not scatter)」となり、単純過去時制否定形 (negative form of simple past tense) は「散らなかった (chiranakatta or not scattered)」となる。ある国語辞典によると「散る」には第一義から第九義まである。それらを列記すると次の通りである。第一義は、「離れ去る、別れ別れになる、ばらばらになる。」第二義は「花や葉が落ちて飛ぶ。」第三義は「ちらばる、散乱する。」第四義は「世に広まる、言いふらされる。」第五義は「にじみ広がる。」第六義は「広がって衰える。」第七義は「心がまとまらない、落ち着かない。」第八義は「酒が杯からこぼれる。」第九義は「(比喩的に) 戦いなどで、いさぎよく死ぬ。」(山田俊雄他三名編、新潮国語辞典、第二版、東京：新潮社、1995年、「散る」の項目。[以下「新潮国語」と略称する。])

一方、英語の “scatter” の辞書の意味 (lexical meaning) は次の通りである。1. a. to cause (a group) to separate widely (一つの集団を広範囲に分散させる)、b. (of a group) to do this (ある一つの集団にこの事 — 分散 — をさせる)、2. to spread widely in all directions (on) (as if) by throwing (例えば投げたりする事によってあらゆる方向に拡散する (Randolph Quirk, *Longman Dictionary of Contemporary English*, Burnt Mill, Harlow, Essex, England, : Longman Group Limited, 1978, s.v. “scatter”) [cited here after as *LDCE*]) 別な英語辞書では次のような辞書の意味 (LM) が出されている。1. to throw loosely about; distribute at irregular intervals : to scatter seeds (乱雑にまきちらす; 不規則な間隔でまき散らす : 種をまく)、2. to send off in various directions (色々な方面へ発送する)、3. Physics (物理学)、a. to refract or diffract (light or other electromagnetic radiation) irregularly so as to diffuse it in many directions (光や電磁波などを不規則に屈折または回折させてばらばらな方向に放散させる)、b. (of a medium) to diffuse or deflect (light or other waves) by collisions between the wave and particles of the medium (光または他の波動を媒質中の粒子と波動との間で衝突が起こる事によって拡散させるかまたはまっすぐな進行方向を変えさせる)、4. to separate and disperse in different



directions (ばらばらな方向に分散するかまた分光する)、5. the act of scattering (分散行為)、6. that which is scattered (まき散らされたもの). (Laurence Urdang, *The Random House Dictionary of the English Language*, College Edition, New York: Random House, 1968, s.v. "scatter" / 参考: 小学館ランダムハウス英和大辞典, vol.3, 1973, 1974, 「scatter」の項目。[cited hereafter as *RHD*. / 以下「小学館ランダムハウス英和」と略称する。]

次に「散る」または「分散する」を和英辞典では、英語がどのように表現しているかの調査においては先の国語辞典、英和辞典、英語辞典等の資料を利用して対象比較してみる事にする。「ちる」の項目を見ると次に「散る」と明朝文字で印刷され、対応する英語表現が出されている。それらは次の通りである。「ちる散る〈花・葉などが〉fall; scatter; 〈群象が〉disperse; break up; 〈雲・霧などが〉break up [away]; (文) be dispelled; lift (霧が); 〈はれ物が〉resolve; 〈にじむ〉soread; run; blur ♯散っているbe [lie] scattered。」

これらの事を要約して述べるならば、日本語で「散る」と言った場合、主語の種類によって「散る」の意味変化が生じるのである。英語の“scatter”にしても主語 (subject) 又は目的語 (object) によって、意味が変化するというよりは、意味が決定されるといっても過言ではないのである。一つの動詞単語には必ず多義性 (polysemy) を有していると言えるし、通時的 (diachronic) には意味変化 (semantic change) に起因するその後の意味拡大・分化・転化が生じるのである。また共時的 (synchronic) であっても、通時的よりは狭い時間帯での意味拡大・分化・転化が絶えず起きており、場合によっては分化・転化が進むと原義の消滅という事もあり得るのである。そうしてヘブル語 — 英語 — 日本語等の様に多言語 (multilingual) においては、当然地理的意味変化 (geographical semantic change) が生じている事は予想されるのである。

漢字の「散」は先に述べたように、「艹」と「月」と「攴」から成り立っており、「艹」は「二十」(twenty) と理解し、「月」はこの場合、地球の衛星の月ではなく「筋髄、筋肉」(muscle) を意味している。「攴」は「ボク」と発音し、漢字の旁(つくり)に用いる時は、「攴」とも書き、棒を表し、全体としては筋髄の固い肉を棒で撃って和らげる意味で、固い肉を棒で打って柔らかくして、ほぐしていくという事から、肉を散らして食べやすくするという意味なのである。丁度それは一つの固まった肉なる言語が、主なる神の力である「攴」=「棒」で撃たれる事によって肉である言語が各散して柔らかくて食べやすい(理解しやす)肉=言語となったのであるという比喩的解釈が成り立つという事は極めて重要なのである。理由は、比喩というのは物事を連想・関連づける事によって、また物事を比較する事によって、そうして類似した他の物事をもってくる事によって、ある物事を表現しようとするものなのである (All figures of speech that achieve their effect through association, comparison, and resemblance; — Tom McArthur, *The Oxford Companion to the English Language*, Oxford: Oxford University Press, 1992, s.v. “METEAPHOR.” [cited hereafter as *OCEL*.])。もう一つの理由としてあげられるのは、A = Bである事を説明する事によって、AとBの二者を簡潔にして要を得た比較をすることができるからなのである (A figure of speech which consely compares two things by saying that one is the other: — *Ibid*.)

- 2) Spiros Zodhiates, ed., *The Hebrew-Greek Key Study Bible* (based on the New American Standard Bible), Chattanooga: AMG Publishers, 1990, 1 Cor. 14: 10. [cited hereafter as *HGKSB*.] / 世界にはおそらく非常に多くの種類のことがあろうが、意味のないことばなど一つもありません (*NJB* / 新改訳、第3版、東京: 日本聖書刊行会、コリント人への手紙第一14章10節)。
- 3) *Encyclopedia Americana*, vol.10, s.v. “Language of the world.”
- 4) 馬場 熙著、「日英両国語比較 (XVII)」、尚綱学院短期大学研究報告集44集別刷、1997年、110頁。
- 5) …there are many acquisitions from languages throughout the world. Because of such a complex background, and because dictionaries and other resources state that they list thousands of headwords and other items, the question often arises: *How many words are there in the English language?* (*OCEL*, s.v. “vocabulary,” p.1091.)
- 6) It is true that we can suport *OCEL*'s view: *In order to reach a credible total, there must be agreement about what to count as an item of vocabulary and also something physical to count or to serve as the basis for an estimate. Counting words (however defined) is wearisome, complex, and difficult, and experience suggests that no matter how well organized there count can never be enough data to ensure completeness. (Ibid)*
- 7) *OCEL* points out the reasons why easy answer might be impossible for the previous question: *How many words are there in the English language?* There are at least five reasons for this: (1) There is no corpus available in a countable form which represents the whole language. (2) Even if there were, it

would only indicate what was available at the time the count started. It would therefore be a static assessment of a dynamic process. (3)The result of the counting would consequently be out of date before the counting was completed. (4)Even with careful safeguards, the total reached would be different for each counter. In practice, counters tend to interpret instances differently and so count items in different ways. (5)The administrative work needed to homogenize the efforts of the counters would be formidable and time-consuming, making the survey even more out of date by the time it appeared. (*Ibid.*)

8) *Ibid.*

9) The existential-clause were being discussed in the previous paper and it was insisted that that existential-clause beginning with *there* cannot be used as subject in any case. And again it is insisted in this paper that the existential *there* cannot be used as subject in any case.

10) The existential *there* which is used to introduced a sentence or clause in which the verb comes before its subject or has no complement. (*RHD.* s.v. "there.")

11) Complement is used to complete a grammatical construction, especially in the predicate, as an object, as *the ball* in *He caught the ball*, predicate adjective, as *large* in *The house is large*, or predicate noun, as *John* in *His name is John*. (*RHD.* s.v. "complement.")

In a restricted use, two kinds of complements are recognized for verb : (1)*Subject complements* which follow the verb *be* and other copular verbs, *my best friend* in *Tom is my best friend*. (2)*Object complements*, which follow a direct object and have a copular relationship with the object : *I consider Tom my best friend*. (*OCEL.* s.v. "COMPLEMENT.")

12) 新潮国語、「かれ」、「ど」、「あらぬ」、「なし」の項目。

13) Genesis Chapter 29 / 創世記29章。

14) Additional registration item.

15) R.M.W. Dixon, *A New Approach to English Grammar On Semantic Principles*, New York : Oxford U.P., 1991) , P.364. [cited hereafter as *ANAEGSP.*]

16) This verb deals with motion with respect to a definite Locus. (*Ibid.*)

17) *Ibid.*

18) ヘブライ語では次の様に表記される : הָלַךְ (halak)

19) ヘブライ語では次の様に表記される : בּוֹ (bo)

20) ヘブライ語では次の様に表記される : הָיָה (hayah)